

いて内外学者の交流をはかるといふ夢があった。また、本年 4 月半ばに私ら数名に財団法人新城荒木記念資料館の理事を委嘱され、その設立を急いでおられたのも、何か虫が知らされたのであろうか；それが届出の寸前で足踏みしていたと聞くに及び、仕上げの釘が一本抜けていた無念さが残る気がする。

京大宇宙物理学教室では、先生は宇宙物理学の講義並びに京大総長になられた新城先生の後を継いで天体力学の講義を担当しておられた。来朝したアインシュタイン博士の京大での講演の際には先生が挨拶されたとも聞いておるし、また、ドイツ留学時は恰も量子力学の完成期であり、帰朝後、京大で初めて量子力学の講義をしたと御本人が語っておられた。新城先生が雄大な構想の下に「宇宙物理学」を開設され、荒木先生はその学統を受け継ぎつつ、新しい天体物理学の分野での研究開拓に寄与；即ち、業績目録に見るように、最初の頃は短周期及び長周期の変光星の理論的研究を、そして留学後は新知識を導入して白色矮星の内部構造論を発表し、その後は栗原道徳講師（当時）を協力者に膨張大気を持つ恒星大気の理論的研究へ進まれた。この後期の研究態勢は宮本正太郎博士の仕事を経て、現在の宇宙物理学教室における研

究へと脈々と継承されている。また、戦時中の帝国学士院の委嘱による日本暦学史の研究があり、新城先生以来の東洋天文学史については、当時の東方文化研究所の能田、藪内両博士らと研修を重ねられ、天体力学の理論的考察の方面では、故芝原鏞一君を経て京産大の吉田淳三君の仕事へとつながっている。先生のも一つの関心事に宇宙構造論があり、戦時中には、電離層構造論や太陽に関する資料調査などにも手を伸ばしておられた。先生は新しいことが好きであった、例えば、エディントンの Relativistic Theory of Electron and Proton が出た時には直ちにこれを講義されたことがあり、また、他方、ペルーからの留学生のために英語で天体力学の講義をされ、最近では、京産大大学院生のため 6 月末まで懇切に講読の指導をしていただくなど、学生に対しては厳正俊敏であると共に親切であった。

最後に私事にわたって恐縮であるが、6 月中旬に私の不備な履歴書の書直しを命ぜられ、その資料集めも兼ねて 7 月 10 日には大阪へ行き、帰来、訃報に接したのであった。不肖の致すところ、先生御生前の最後まで御心労をわずらわし、誠に申訳なく、その後、整備して提出したことを書添え、先生の御冥福を祈りつつ合掌して筆を擱く。

今は亡き荒木俊馬先生

能 田 忠 亮

私たち平生荒木俊馬先生が、非常に元気だったことを良く知っていたものにとっては、先生が急逝されたと聞いても、皆耳を疑ったに違いない、しかもその日の屋頃親しく先生の元気な話を伺ったものにとっては、同じ日の 7 月 10 日の夕頃の 7 時ごろ、先生が急に亡くなられたと急に知らされても、誰しも信ずることが出来なかったとしても無理からぬことである。

私が最近親しく先生にお目にかかったのは、6 月 27 日（木）、下鴨の生研グリルにおける昭和 53 年度京都産業大学天文同好会の席上においてであった。参集した教官は、能田・清永・井上・吉田・三好・原の 7 名、学生諸君の方は 14、5 名くらいだった。荒木先生は少々遅れてから見えられ、盛んに冗談をいい乍ら、「僕は総長としてではなく、同好会員のつもりで出席せよとのことであったが、それなら会費も少々ですむので有りがたい。今日は能田君の喜寿の祝を兼ねての会合だそうで、能田君お目出度う。今日は恰も家内（京子夫人）の誕生日で、義兄（夫人の兄君新城英太郎氏）と三人で祝酒をやりましてネ。二人とも君の喜寿に祝意を表していたよ」と大分ゴキゲンであった。そして此処がすんだら家まで飲みに来ませんかということだった。実は以前から色々お話も

あり、相談もしておき度いことがあったので、前期試験でも済んで少し暇になったら、ユックリと参上することになっていたので、今夜のところは御遠慮申上げたのであったが、これが永のお別れになったかと思うと、まことに残念なことをしたと悔まれてならない。

想起すると古いことながら、私が京都帝国大学理学部宇宙物理学科に入学したのは、大正 12 年（1923）4 月であった。荒木先生は此の年 3 月 26 日に、理学部宇宙物理学科を卒業され、その 9 月には助教授に任命された。私どもは此の荒木先生から天体力学を、大正 14 年（1925）11 月まで受講したものである。これがそもそも荒木先生との結びつきの始まりである。大正 15 年（1926）3 月に卒業して以来 53 年間からのおつきあいである。

特に私が一生を通じて忘れ得ぬことは荒木先生から受けた恩恵のことである。私が京大卒業以来十有餘年間、つまり東方文化研究所研究員時代に荒木先生から親身も及ばぬお蔭を蒙ったことを思い出す。今、拙著東洋天文学史論叢（恒星社版、昭和 18 年（1943）、10 月 28 日発行）に寄せられた序には、

理学博士能田忠亮君は余の学と酒の友なり、大正 12 年（13 年とあるは 12 年のまちがい）余が初めて京都大

学の教壇に立ちて天体力学を講ぜし時同君はその聴講者の一人なりしが、顧るに当時余の講義は寧ろ余自身の勉強に外ならず、僅かに西人の書を翻訳口述せる程度にすぎざりしかば、能田君は固より余の弟子とは謂ふ可からず。学足らざる所、之を補ふに酒を以てす。蓋し酒に於ては余は真に同君の師たるを耻ぢずと雖も、その師たるや方に悪師の最たるものなりしか、為めに同君は大正 15 年 (1926) 学を卒ふると同時に突如咯血して病に倒れ、故山に帰りて三年静養の止む莫きに至れり、然れども再起後は酒量旧に倍し、昔日の瘦身は今日の巨軀、蓋し能田君の如きは、酒に因りて病を獲、然もよく酒に依りて病を剋したるものと謂ふ可きか。爾来 20 年、能田君と余の交友は酒と分つ能はず、肝膽相照らして機を得れば即ち共に痛飲して夜を徹す。而も今やその酒勢に圧せられて恒に畏敬措く能はざるは余が現状なり、これ能田君が同酒の友たる所以なり。元来能田君は理論宇宙物理学研究に志を立て、渦状星雲進化論の如きは其の得意とする所なりき、然るに昭和 3 年 (1928) 偶々外務省に於て東方文化事業の計画あり、当時此の研究事業の発起者の一人たりし故新城新蔵博士は東洋古来の自然科学の存在を世界に宣揚せんには、支那古代天文学史の徹底的研究に若く莫きを洞察、該方面の研究に新進の人材を求めて余に諮らる。余以為、推理文才俱に備わりて適任なるは能田君を措きて他に有らざるを可しと。乃ち同君の出慮を促せり、此の勧誘は始め同君の心を動かすこと必ずも大ならざるが如くなりき。蓋し理論宇宙物理学の専攻を続けたらむも、今日その権威者となりしこと疑いの余地なかりければなり、然れども同君を新天文学の曠野より古典研究に驅りたてたるは、実に彼の酒の師たる余なりき。かくて同君は東方文化研究所の人となり、古典天文学の造詣愈々深きを加ふると同時に、同研究所の文科諸專家の間に互して研鑽琢磨、支那学研究に専念し、竟には支那学者としても一流の名声を博するに至れり、惟ふに能田君は古典の墓場をして百花燦爛の春野となせる人なり、されば今日余も亦此の方面の学間に興味と関心浅からざるに至りたるは、故新城博士の感化に因るは勿論なれど、能田君の啓発に俟つこと虧からず、機あれば輒ち学を談じ説を論じて往々食を忘る。これ能田君が余の同学の友たる所以なり。今、同君の雄著成るに当りて余に命ずるに序文を以てせらる。固よりその任に非ずと雖も、学酒の友たるもの豈辭するを得べけんや。敢て能田君の清酒一斗に余が一杯の濁酒を添ふる所以なり。

本書は能田君が始め故新城博士の指導を受け、後更らに師の志を継ぎて研鑽十五年、その間に発表せる論

文中最も創意に富めるもの六編を輯録して成れるものなり。

と述べられ、さらに本書が中国古代天文学史上に占むべき地位と、著者の研究態度並に研究方法に関して、一般読者諸君に幾分か理解を与えるために、若干の蛇足を加ふるも亦意義なきにあらざるとし、まず礼記月令天文攷をとりあげて概観し、是に由って著者の研究態度と研究方法の一端を窺知することが出来るとしている。ついで周髀算經、漢代論天攷、五星聚井の弁、詩經の日食に就ての五篇についても同様のことを述べている。そして故新城新蔵博士が創設開始された完璧な天文年代学的中国天文学史の学統を完成するものは、その直伝の高足たる能田忠亮君を措いて他にないと激励されたことは、まことに感銘深きものがある。この感銘は今日猶新たなる感激を駆り立ててくれる。ここに謹んで荒木先生の冥福を祈り、先生の期待に沿うてさらに中国古代の天文学を宣揚したいと思う。

荒木先生は昭和 20 年 (1945) 京都大学の教授を退官せられ、府下の上夜久野に隠棲し、専ら著作に没頭、天文学宇宙物理学総論、現代天文学事典などの大作を残された。昭和 40 年 (1965) には、京都産業大学を上賀茂本山に創設され、学長兼理事長となり、戦後、真の大学の在り方に留意され、昭和 44 年 (1969) には教養部・経済学部・理学部・法学部・経営学部・外国語学部・大学院と発展して殆んど完全に近い総合大学となった。昭和 46 年にはエルサレム聖ヨハネス修道団よりマルタ騎士団勲爵士、Knight of Grace 十字勲章受章、昭和 51 年 (1976) 5 月 7 日にはポーランド人民共和国からポーランド最高功勞十字勲章 (Gold Comandria) 受章された。今年昭和 53 年 4 月 1 日から総長は大学院長も兼ねることとなり、京産大の名声は日に日に国の内外に高まりつつある矢先、荒木総長の急死は、惜みて余りあることである。今少し命を大切に下さったなら、産大の充実も促進できたのではなかったかなどと、つい愚痴っぽくなる。荒木先生ならではの仕事も残されているやに見受ける。今はただ大法院偉哉俊馬居士のご照覧により、遺族はもとより同業のわれら一般にも加護を垂れたまわらうようお願いするばかりである。因に先生の享年 81 才。

故荒木俊馬先生 (1897~1978) 略歴

| | | | |
|-------------------|-------------------|------------------|-----------------------|
| 明治 30 年 3 月 20 日 | 熊本県鹿本郡来民町に生る。 | 昭和 22 年 3 月 10 日 | 公職追放 |
| 大正 12 年 3 月 | 京都帝国大学理学部宇宙物理学科卒業 | 昭和 26 年 8 月 6 日 | 公職追放解除 |
| 大正 12 年 4 月 | 京都帝国大学理学部講師 | 昭和 29 年 10 月 1 日 | 大谷大学教授 |
| 大正 13 年 10 月 | 京都帝国大学理学部助教授 | 昭和 39 年 5 月 13 日 | 日本天文学会名誉会員 |
| 昭和 4 年より昭和 6 年 | ドイツ国に留学 | 昭和 40 年 2 月 1 日 | 京都産業大学学長 (初代) 兼理事長 |
| 昭和 4 年 8 月 1 日 | 理学博士授与 [京都帝国大学] | 昭和 49 年 9 月 24 日 | 京都大学名誉教授 |
| 昭和 16 年 3 月 8 日 | 京都帝国大学教授 | 昭和 53 年 7 月 10 日 | 京都市左京区吉田中大路町一番地の自宅で永眠 |
| 昭和 20 年 1 月 | 大日本言論報国会理事 | | |
| 昭和 20 年 10 月 29 日 | 依願京都帝国大学教授退官 | | |